
日常？それとも...非日常？

霜月 一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常？それとも…非日常？

【Nコード】

N1656F

【作者名】

霜月 一葉

【あらすじ】

英語が好きな大学生、小倉和希おぐらわづきがある日目を覚ましたら…なんとそこは2年半前の世界、しかも女の子になっちゃった！？そんな和希…改め一希いっきの視点で描くドタバタ学園コメディー！

1：ある日、目が覚めたら…！？（前書き）

注意

この作品は百合的な内容を含みます、百合が苦手な方は読まれないことを推奨します。

それでは、それでもいいという方はどうぞ。

1：ある日、目が覚めたら…!?

「ふあ…」

僕こと小倉 和希はいつも通り、朝7時ちょうどに起きた。いささか早い気がしたが、眠気で気にする余裕も生まれない。のんきに目を擦りつつ、階段を下りてリビングに向かえば朝ご飯がある。家族みんなが集まり次第食べ…

そう、ここから日常じみた非日常が始まったわけ。

…なんか声がいつもとは違う、高い。いくらもともと高めとはいえ、違和感を感じずにはいられない…そのとき。

「お姉ちゃん、どうしたの…?」

「お姉ちゃん、って…?」

「はあ…そこまで天然なんて、ね。それに、一人称おかしくない? いつもは『私』なのに。」

その違和感を感じたであろう3つ下の妹の言葉に、そのまま口の中のご飯を丸呑みし慌てて洗面所へ…

僕…いや私が鏡を見れば、そこには下手なモデルより綺麗な、かつ僕の母の面影を残す容姿の少女がそこにいる。もちろん、私が目を擦ればその少女も目を擦り、伸びをすれば同じく伸びをし…

「…!?!?」

あまりにも突然の出来事に、声すらも上げられない。そう、僕は…今鏡に映っている少女そのものなのだ。

幸いなのは、僕はこういったことを携帯なりPCなりで目にしていることと、いわゆる性転換ものが好きなことだろう…それに…

「It can't be helped…」(なるようにしかならないよね…)」

…一応ポジティブに、こう思えることも。

リビングに戻れば残りのご飯を食べ終え、いつもならテレビでニュースを見るのだが…

そういえば、まだ大学に行く用意ができてなかったような…

と思いつつ部屋に戻れば、何故かそこには高校のとき使ったバッグが置いてある。

「ってことは…!」

案の定、辺りに適当に積みかかっているのは大学の教科書ではなく高校の教科書。

もしかと思い、携帯を開けば…

- 2006/4/5 7:25 -

「ああ、だからなんだ…」

今の自分の状況に納得しつつそう呟けばバッグの中に…あった生徒手帳を見ると、それは私が高校2年であることを示している。ついでに女子になりどう名前が変わってるか確認し、念のため有効期限を確かめれば…

「一希いちつき…私の名前ね。2007/3/31まで有効と…確かに、今年度いっぱいだし。って、えっ…!？」

つまり僕は、女子になった上に2年半もタイムスリップしていたのだ。

仕方ないので、春休み前に買ったプリントを見ながらいるものを入れていき、終えるなり時間と洗面所を確認して部屋を閉め切り着替えを…まあ、朝は皆が忙しいので着替えは僕の部屋で行わざるを得ないみたい。

「気持ち小さいけど…これくらいならむしろいい方かな…」

やはり元男子、胸が気になってしまうもの。ただ望んでいたサイズでホツとする…

「って、そんなことしてる時間ないのに！」

御家芸の独り言を言いながら着方があまりわからないなりにさつさと制服を着、洗面所へと向かう。リボンが簡単に付けられホツとしたのが印象に残り…やはり寝癖はそこそこすごい、私が長い髪が好きで背中まで伸ばしているせいだろうが。勝手こそわからないが、鏡の周りを見渡せばいつもの整髪料を使っているくらいは想像がつく。無香料のものを手にとり、髪に馴染ませる…

「なんか、女性の苦勞が垣間見えるな…でもかわいい…って、自画自賛じゃん！」

さて洗顔もすませれば、もはや出発する8時になっていたので弁当とお茶を入れて家を出、自転車に飛び乗り学校へ向かう。

さて、私は今日一日無事に過ごせるだろうか…

伸ばした髪を空気抵抗による向かい風紛いなものになびかせながら、
私はふと思った…

1：ある日、目が覚めたら…！？（後書き）

さてさて「日常？それとも…非日常？」を始めました、思い付くままに書いてるので内容もあまりなく、表現もおかしいとは思いますが批評、指摘、感想など頂けると嬉しく、創作意欲がわきますので是非是非お願いします！

それでは、そこそこはちゃめちゃんな主人公の紹介です。

小倉 一希

16歳、清明高校2年A組。

背中の中ほどまではあるうかという明るめな茶色の髪が大人びた顔付きを引き立たせるが、内面はいたって子供っぽくドジで天然、しかもなかなかのマイペース。

百合趣味で変態、攻めよりに見せかけていったん攻められると完全に受けに回ってしまうタイプ。

その割には自分がリバだと思っていて、周りの人の属性を勝手に決めつけては楽しんでいたりする。

よく頭がいいのか悪いのかわからないといわれ、そのうえかなりの運動音痴。

英語と物理、化学と世界史、日本史が得意で古文と数学、生物と体育が苦手で古文から逃げるために理系を選んだとのこと。かなりの声優オタでしかも百合系統の話にやたら詳しい。

歌は好きで声はやたら高く、透き通っている。一人称は私。

2：心機一転、新学年の始まり

さて、僕が…いや私も通っている清明高校の校門にたどり着けば、何やら白いクラウンが止まり…ん？なにか見覚えがある。

「そのような気遣いは無用ですよ…おはようございます、一希…いや、和希？」

声のした方向を向けば…そこには高貴な雰囲気を纏った、私と同じ制服を着たモデルがいる。そんな雰囲気とか出で立ちからしてどこぞのお嬢様かと思うけど…私と僕の名前を知っているのはともかく、なんで私にそんなに親しげなのだろう？

「あの…どちらさままで？」

「大丈夫ですか…？わたしは福山 ふくやま 光 ひかり ですけど。」

ひかり…？そこからさほど時間はかからず、僕の親友の「光」（ひかる）を連想した。

「って、えええええ！？」

「あら、なぜ驚いていらして？」

そこで私は、今朝からのことの次第を光に話した。

「つまり、貴女には女性としての記憶をお持ちではありませんのね…」

「え、ってことは…光は持ってるわけ？」

「はい、ただ貴女からなかったとはいえ、莉緒 りお や灯 あかり、麻琴 まこと や陽菜 ひな からメッセージが私の元に来ましたね…皆が女性としての記憶もお持

ちになられていることも拝見致しました。」

補足だが、光が挙げた面々は私たち去年のクラスメイトである。それより…頭をよぎった不安が、そのまま言葉に表れる。

「まさか、記憶ないのは私だけ…？」

「今知りえる段階では…すみません、このような場所で立ち話は滅入ります。」

「そう…なら教室行こ。」

「はい、お持ちでない方が見つかるとうろしいですね…」

やがて私たちが教室へと着けば、そこには既に多数の生徒が…これからクラスメイトとして付き合うことになるのだろう。小中、そして高1のときも見慣れた光景でこそあるのだけれども…みんな、再開を楽しんでいるように見える。すると、去年からの知り合いの人…坂本さかもと 亜希あきが私たちに声をかけてくる。まあ、僕の時の世界では誰だったかはわかるが…こちらでの名前がわからない。

「あ、小倉ちゃんに福山さん。おはよ？」

「おはよう…して私のこと、ファーストネームで呼んだっていいじゃないん？」

「ええ坂本さん、ご機嫌うるわしゅう。」

友達の前なのに…光はフォーマルに、腰を軽く落としてスカートの両端を軽くつまんでの一礼をするんだよね…

「ごめん…一希？慣れないの、他人行儀つてのはわかるんだけど…でも福山さんはもう少し…一希を見習ったほうがね？私、そういうの苦手。ねえねえ、それより2人とも、見た？七里のサイト。」

「うっん、家まだPCないし…私の携帯だとサイズ足りないし。」

「なーんだ残念…携帯版あればいいのにね？」

補足ばかりでしつこいのだが七里とは快活なキャラが得意な、天然なことでも知られている亜希が大好きな男性の声優さんのことだ。

「ほんとだよね…仕方ないから私は立ち読み。」

「まあ広く浅くならそれでいいけど、深くは入れないだよね。」

「七里さんならわたしも好きです、あの方は一希並に天然で面白くて。」

なぜか光はしばし間隔を置いてから話に交じり、それにすぐに切り返す亜希。

「あ、さすが福山さん、いいこと言う！」

「ふふ、ドジでは一希に勝てませんけど。」

「もう、なんで笑うの〜!!」

さすがに声が大きすぎたのか、教室にいるみんなが一斉に私を見る…

「一希…耳が、痛いです…」

「わ、私も…」

当然近くにいた2人は耳をふさぎ、そのなかでみんなにすまなそうに謝り…すると後から教室のドアが開く。振り返れば、今年度1年間担任してもらった、背の高い白髪混じりの先生がいた。

「小倉、もう少し静かに言ってくれ…」

「すみません、神城先生。1年間、よろしく願います…」

「うむ、それより諸君…講堂に向かうように。」

その指示に時間が早く流れたことを痛感しながら、私たちは始業式
へと向かう…

2：心機一転、新学年の始まり（後書き）

さて、だいぶ時間はかかりましたが第2話です。時間の流れをうまく表現できてない気がします。密度は前回よりあると思います。

それでは、今回登場する中で主要な2人を紹介します。

福山 光 ふくやま ひかり

16歳、清明高校2年A組。

一希の親友で某鉄道会社の社長令嬢、外見と中身の両方が大人っぽい。

モデルのような出で立ちをしているがそういう関係にはあまり興味がなく、むしろアニメや声優などの部類が好きだったりする。

その一方口調や行動、容姿のせいなのかどこかお高い印象を受け、時として近寄りがたい雰囲気すら醸し出すこともある。

本人いわく属性はリバならぬNとのことで、一方かなりの苦労人体質。

そして至って考えはNLで、BLGLはナンセンスと考えていることもあってか一希を制御しつつも振り回されている。

世界史がやたら得意で、だいたい学年で一桁にいるほど。

それ以外はバランスがとれていて、あまり苦手な科目こそないがどちらかといえ文系。一人称はわたし。

坂本 亜希 さかもと あき

16歳、清明高校2年A組。

一希と光の友達で背は低め、外見中身ともに両性から好かれるタイ

プ。

黒い髪はそこまで長くはなく肩より少し長めな程度で、見た感じに
違わずそこそこしつかりもの。

一希に同じく声優系統に詳しいが、光に同じくNLにしか興味はな
く一希の行動には時々困惑している。

一方乙ゲーにはそこそこ詳しく、七里が好きなため彼の出演作品は
大体揃えているとのこと。

どんなことにも努力を惜しまないタイプだが、グロに対する耐性が
間違った方向に進むこともあり一部からはあまり好かれていない。

根っからの文系で英語と国語はかなり得意で、理系科目が苦手にも
関わらず学年ではよく上位に食い込んでいる。

ただ、実技科目は体育を除きすごく苦手だったりもする。一人称は
私。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1656f/>

日常？それとも...非日常？

2010年11月12日11時18分発行